

マルコの福音書10:35-45 より深い恵みの中へ (26. 3. 22)

皆さん、最近、札幌でもようやく雪が解け始め、道端でランニングをしている人たちをよく見かけるようになってきました。

マラソンには「デッドポイント(死点)」という瞬間があるだそうです。息が切れ、心臓が破裂しそうで、今すぐ立ち止まって諦めたいような苦痛の地点です。

しかし、不思議なことに、その苦しみの限界をこえて一歩踏み出したとき、突然苦痛が消え、言葉にできない喜びとエネルギーが湧き上がってくる瞬間があります。これを「ランナーズハイ」と呼びます。

それは、すくなくとも3km以上走り続けている人に発生しやすいだそうです。なので、ちょっとだけ、走ってあきらめる人には味得ないし、ただ走っている人を眺めている人には、決して分からない喜びです。ただ、その苦難の区間を通り抜け、自分を否定して走り続けたランナーだけが味わえるものです。

信仰にも似たところがあります。イエス様が歩まれた道を遠くに離れて眺めているだけなら、何の苦しみもなく楽かもしれませぬ。しかし、そこには神様がくださる本当の喜びないです。イエス様が歩まれた苦難の道、仕える道という「苦痛の区間」の中に、私たちが足を踏み出すとき、世の中が与えることのできない天の平安と「霊的なランナーズハイ」が、私たちの魂にも訪れるのです。

1. ヤコブとヨハネがイエス様に要求したこと

イエスの弟子であるヤコブとヨハネは、イエス様のもとに来て次のように要求しました。37節「彼らは言った。「あなたの栄光の座で、ひとりを先生の右に、ひとりを左にすわらせてください。」

彼らが求めていたのは、イエス様が政治的なメシアの王国を築いたとき、その右側と左側の「特別な席」に座ることでした。弟子たちが欲しがったのは「高い地位」です。権力があり、多くの人々から仕えられる立場です。すべてを降ろして、イエス様に付いてきた弟子たちの心の中には、実はこのような世俗的な期待がありました。

しかし、イエス様は今、弟子たちが求めているその「座」が本当はどのような場所なのか、次のように語られました。

38節を読んでみましょう。「しかし、イエスは彼らに言われた。「あなたがたは自分が何を求めているのか、わかっていないのです。あなたがたは、わたしの飲もうとする杯を飲み、わたしの受けようとするバプテスマを受けることができますか。」

弟子たちが求めている「座」について、イエス様は「わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることができるか」と問われました。

まず、聖書において「杯(さかずき)」という表現は、「神の怒りの杯」や「苦難の杯」として表されます。イエス様がゲッセマネの園で「できることなら、この杯をわたしから過ぎ去らせてください」と祈られたときも、それは「苦難の杯」でした。何の罪もないイエス様が、私たちの罪のために神様の裁きを受けなければならなかったからこそ、それは苦難の杯だったのです。つまり、イエス様に付いていく中で私

たちが会おう苦難の杯を意味しています。たとえ、イエス様を伝えるために受ける困難や、イエス様に従う上で受ける迫害のことです。それは確かに難しく、大変なことです。

また、「バプテスマ」、を受ける時は、水に完全に沈んでから上がるのです。つまり水に沈むということは、自分が完全に沈んで死ななければならない「犠牲」を意味します。

イエス様は、人の先に立ちたいと思うものは、みんなの僕になりなさいと語られました。偉くなりたいものは、仕えるものになりなさいとも言われました。仕えるということは、自分の自我を捨てなければならないですね。私たちの性質は、誰も仕えたくないですよ。仕えられたいですね。「仕える」という言葉の語源には、「食卓で給仕をする人」という意味があります。当時の僕たちは、主人が座って食事をしている間、自分は座ることもできず、料理を準備し、運び、皿を片付けて皿洗いまでしました。それが「仕える者」です。私たちがポットラックの時間を毎週持っていますが、皿洗いをしてくださる方は、仕えていることですね。皿洗いが別に大好きでやっているわけではないですね。トイレの掃除も誰かがやってくださっているのですが、別に好きでやっているのではなく、イエス様のように仕えたい心でやっています。普段は、喜ぶ心でやっているけど、時にはやりたくない心もあるでしょう。でも、その心を折ってやる時もあるのです。

仕えるということは、自分の自我を折る「犠牲」が伴うのです。

まとめると、イエス様に付いていく中で、苦難の中にあっても信仰によって従い続け、他人の救いのために自分を犠牲にして歩む者が、神の国で偉い者だということです。そのような苦難と犠牲を多く担う者が、イエス様の右と左の座にふさわしい者であると言う意味です。

ですから、ヤコブとヨハネが考えていたことと、イエス様が言われたことは全く別のものでした。イエス様が「わたしが飲む杯を飲み、わたしが受けるバプテスマを受けることができるか」と問われたとき、彼らはよく分からないまま、「はい！ できます」と答えてしまいますね。もちろん、今は違いますが、後でこの二入の弟子は、主のために苦難を受け、主のために犠牲を払う人生を歩むことになるのです。

本文に現れている弟子たちの姿は、実はイエス様が受ける苦しみに大して関心がありませんでした。だってイエス様が弟子たちに十字架の苦しみと死について三回も話されました。本文のすぐ前の話は、三回目のイエス様の苦難と死の話だったのですが、弟子たちは関心がないです。分かりません。ただイエス様を通して自分たちの成功や利益しか考えがなく、苦難に対する理解も関心も持っていなかったのです。

そのような弟子たちの信仰の態度の結果はどうだったでしょうか。自分たちに少しでも困難が訪れそうになると、あまりにも簡単にイエス様を否認し、背を向けて去ってしまいました。

ところが後になって、弟子たちはイエス様の苦難と死の意味を悟ることになります。それも、イエス様がその杯を飲み、バプテスマを受けられたのは、まさに「自分のため」だったと知った時には、弟子たちはイエス様の苦難を喜んで担うものになりました。もう「苦難のない栄光」を求めることはありませんでした。苦難が来ても信仰によって従い続け、イエス様を伝えるために直面する不便さや困難を避けることもしませんでした。もう「イエス様を否認する人生」ではなく、自分を否認し、イエス様に従って歩む人生となったのです。

そのような弟子たちの変化の結果はどうだったのでしょうか。彼らを通じて教会が建てられていきました。イエス様を知らない人々が主を信じるようになりました。そして、言葉では言い表せないほどの神様の大きな恵みを経験することになったのです。

その違いは、イエス様の苦難と死の意味をどれほど理解しているかによって決まりました。そして、イエス様が歩まれた「仕える道」を共に歩んだのか、それとも犠牲をなるべく避けたい、仕えるではなく、仕えられたい。ただイエス様から得られる利益だけを求めている姿によって大きな差が分かれました。

これは弟子たちだけの話ではないと思います。イエス様を信じるすべての人に当てはまります。私たちも、この本文に出ている弟子たちのように、イエス様を通して何かを得ることだけを願い、仕えることなく、イエス様に従う上で伴う困難を避けたいという、ただ「楽に」イエス様を信じたいという心を持ってしまうことがいくらでもあります。

しかし、そのような信仰の姿勢では、自分自身は楽にでられるかもしれませんが、そこには何の霊的な実も結ばれないです。苦難と犠牲なしで実れるものがあるのでしょうか。果物だって、農夫はたくさんの苦難と犠牲が伴います。一つの教会が建てられる時もたくさんの誰かの苦難と犠牲の上で建てられます。そして、犠牲や従順を避け、楽に信仰生活をしようとする者は、神様の大きな恵みの深さを十分に体験することができないのです。むしろ弟子たちのように、イエス様を信じるのが「不自由」に感じたり、困難が近づいたりすれば、イエス様を捨てて去ってしまうことになりかねないのです。

しかし、重要なのは、イエス様がこの本文の弟子たちを責めなかったということです。むしろ、そのような弟子たちを待ち続け、さらに深い恵みの中へと導いてくださっています。それが45節です。

つまり、それは人間の意志でできることではなく、神様がそのように導いてくださるのです。神様がそのような心、慕い求める心を与えてくださるのです。

自分のために、神様であられるイエス様がどのような苦難と犠牲を払ってくださったのか。聖霊によってそのことを悟ったとき、初めて少しずつイエス様が歩まれたその道を共に歩む者へと変えられていくのです。そして、神様はそのような人を通して神様の教会を建て上げ、魂を救い、神様の驚くべき恵みを以前よりもさらに深く味わわせてくださるのです。

ですから、まずイエス様がどのような道を歩まれたのか。イエス様が私たちのために何をしてくださったのかがよく表わされているのが45節です。イエス様は45節で何とおっしゃったのでしょうか。

45절 “人の子が来たのも、仕えられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人たちのための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。”

イエス様は、本来であれば十分仕えられるべきお方ですが、「仕えるために来た」とおっしゃいました。さらに、多くの人のための「贖いの代価」としてご自身を与えるために来たと言われました。

この「贖いの代価」という言葉を正確に理解するためには、レビ記における「献げ物」の制度を理解する必要があります。なぜなら、イエス様に対して使われている多くのイメージは、レビ記から来ているからです。例えば、「見よ、世の罪を取り除く神の小羊」(ヨハネ1:29)という言葉も、レビ記の献げ物と深く関わっています。

ですから、レビ記をよく理解すれば、「贖いの代価」という意味をよく理解できるようになります。

まず、レビ記の全焼の献げ物は、神様と契約関係を結んだイスラエルの民が罪を犯したとき、神様との関係を回復し、維持し続けるための手段として、神様が定められたものです。なので、全焼の献げ物の第一の目的は「贖い」ですね。罪の許しを受けるために、いけにえを捧げる人は傷のない羊や牛を連れて幕屋へと向かいます。そして、連れてきた動物の頭の上に、捧げる人が直接「手を置き」ますね(按手)。このとき、手を置くことは、その動物と自分を「同一」するという意味があります。つまり、その動物は自分に代わって「身代わりの犠牲」となるのです。

按手をした後、捧げる人が直接その動物を殺します。そして、その血を祭司が受け取り、祭壇にまきます。そこで終わりではなく、捧げる人が動物の皮をはぎ、各部分に切り分け、祭司がそれを祭壇の上で焼き尽くすのです。

想像してみてください。自分の罪のために、自分の代わりに動物が死ぬのです。どれほど恐ろしいことでしょうか。自分の罪のゆえに動物が血を流しながら、死んでいく姿を見て、一体何を感じるでしょうか。「自分の罪のために、この動物が身代わりに死んだ」ということを痛感するはずですが、皆さん、羊や牛が殺されると、静かに死んでいくのでしょうか。命を奪われるとき、どれほど激しくもがくか分かりません。

以前、埼玉でコンビニの夜勤アルバイトをしていたときのことで。朝の5時、夜が明ける直前に外の駐車場の掃除をしていました。すると、遠くの方からかすかに悲鳴のような声が聞こえてきたのです。はっきりとは分かりませんが、それが豚を屠る声であることは後で分かりました。なぜなら、そのコンビニの前の道を、豚を積んだトラックがよく通っていたからです。それで、近くに屠畜場(とちくじょう)があり、みんなが寝静まっている時間帯に作業が行われていたのです。遠くから聞こえてくる豚の悲鳴に、私は少し鳥肌が立ちました。

イエス様が、私たちのために、贖いの代価として命を与えたというのは、イエス様が代わりに苦しみを受け、十字架で死んでくださったということです。イエス様は私を生かすために、数えきれないほどの苦しみがありました。

聖書を見ると、イエス様が人々からどれほど多くの嘲りや非難を受けられたか分かりません。十字架にかかっているイエス様に向かって、「おまえが救い主なら、今すぐ降りてきて自分を救ってみろ」と嘲り、顔に唾を吐きかけ、頬を打ちました。もし、私たちが何の落ち度もないのに誰かに頬を打たれたら、その怒りで夜も眠れないでしょう。もし、誰かに顔に唾を吐きかけられたら、耐えられるでしょうか。

イエス様は顔に唾を吐きかけられ、頬(ほお)を打たれました。もし、自分が何の悪いこともしていないのに、人前で突然頬(ほお)を打たれたらどうでしょうかね。私、嫌な人に頬を打たられたことがあったのですが、その日、悔しくて、怒りで眠れませんでした。もし顔に唾を吐きかけられたら、耐えられる人がいるでしょうか。イエス様は、十字架を背負うことすらできないほどに鞭打たれ、十字架に釘付けにされ、すべての血を流し尽くす苦痛の中で殺されたのです。イエス様には何の罪もないのに、私の罪のために、私が受けるべき罪の報いを代わりに受けてくださったのです。そのおかげで、私は罪と死から救われ、生きる者となりました。私たちが救われたのは、このイエス様の犠牲があったからなのです。

イザヤ53:5節にはしかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた”

三浦綾子の小説「塩狩峠」の主人公であり、鉄道員であった永野信夫は、列車が険しい峠を登っている最中、客車の連結器が外れて逆走し始めたとき、自分の体を投げ出してブレーキの役割を果たし、乗客たちの命を救いました。

顔も名前も知らない人々のために、自分の命を捨てて死から救い出した主人公のように、イエス様もまた、罪のために死ぬしかなかった私たちの身代わりとなって、その尊い命を捧げてくださったのです。

旧約聖書では、牛や羊が身代わりとして、贖いの献げ物とされました。しかし、よく考えてみてください。その牛や羊も、価値としては相当なものではないでしょうか。ここ北海道では、和牛一頭に100万円以上の値がつくと聞きます。羊一頭でも10万円ほどします。そうしたら、神様であるイエス様の命は、それらとは比べものにならないほどの価値があります。そのイエス様の命によって私が生かされたのですから、私の価値は計り知れないほど大きいのです。

なので、まず、自分のために、命さえも惜しまずに捧げてくださったイエス様がおられるということを私たちは、覚える必要があります。

誕生日に誰かからサプライズで祝福されたら、喜び、感動します。ケーキを準備してくれ、思いがけないプレゼントをもらえば、心から感謝を感じます。それ以上に、イエス様は私のために数々の苦しみを受け、代わりに命を捨ててくださるほどに私を愛し、私を尊い存在として見ておられるのです。誰よりも私を立ち上げさせ、助けたいと願っておられるお方です。イエス様のその仕えと犠牲によって、私は救われ、生きることができたのです。

イエス様の苦難と死は、決して無駄ではありませんでした。イエス様が苦勞だけして終わつたと、聖書は言っていません。たとえ苦痛と痛みがあつたとしても、そこには栄光ある復活があり、罪人の救いを完成させ、悪の勢力に打ち勝ち、さらに価値のある数多くの実を結ばれたのです。

弟子たちも後になってイエス様の道を共に歩む者となり、困難や痛みはありましたが、神様は弟子たちを通して教会を建て上げ、魂を救い、神様の大きな恵みを経験させてくださいました。弟子たちは、苦難のない栄光を求めていたときよりも、イエス様の苦難に共に参加する時の方が、はるかに深く神様の恵みを経験することになったのです。イエス様を伝えたときに病の人が癒やされ、悪霊が去り、困難に直面した時、天使が来て助け出し、神様の大きな慰めと御業を経験することになりました。

現在、私たちは四旬節の期間を過ごしています。四旬節とは、イースター)前の、日曜日を除いた40日間の期間を指します。イエス様の苦難と死を深く黙想し、復活の栄光を準備する期間です。なので、この期間、イエス様の苦難と死を深く黙想して、まず自分のために命まで捧げてくださったイエス様を通して、力を得る時間となりますように願います。

そして、イエス様が歩まれたその道を私たちも、共に歩む者となることを切に願います。イエス様が私を救うために低くなり、仕えてくださったように、私たちも主が歩まれたその道を歩んでいきましょう。その道は、時には自分自身を否定しなければならないです。時には困難もあります。しかし、私たちがイエス様の歩まれたその道を歩むなら、きっと主なる神様は、イエス様の御心通りに生きる私たちに訪れる困難を、ただの苦しみで終わらせないでしょう。

まずは誰よりも、神様が分かってくださり、認めてくださいます。今日の聖書箇所でもイエス様が言われました。主のために仕えて歩む者たちが、わたしの右と左の座に座ることになると。誰も気づかなくても、神様だけはすべてをご存じなのです。

教会にも、誰にも知られずに黙々と仕えてくださる方がいます。トイレの掃除を黙々とこなし、教会の必要のために黙々と仕えてくださる方がいらっしやいます。たとえ人々が気づかなくても、主のために仕える者を、神様は分かってくださり、報いてくださるのです。その事実が、どれほど力になり、慰めになるのでしょうか。

黙示録 7:17節「また、神は彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださるのです。」

イエス様の名を否認せずに歩んできた者たちの困難、その涙を、神様が拭ってくださると約束しています。

神様が私の苦労と困難をすべて知っておられ、涙を直接拭いてくださるということが、どれほどの慰めになるのでしょうか。しかし、もし私たちがイエス様の歩まれた道は辛いから、大変だからと避けて歩まなかったら、イエス様にお会いしたときに涙が出るのでしょうか。主のために苦難の中でも従順し、苦しむ耐えながら、生きてきた人は、イエス様の前に立った時、涙がとまらないと思います。しかしそうではない人は、主の前に立ったとき、涙どころか、気まずいと思います。もちろんイエス様そのような方も温かく抱きしめてくださるでしょうが、その分、感動は少ないかもしれません。

また、私たちが主の歩まれた道を歩むなら、神様はその人を通して神様の教会を建て上げ、その人を通して魂を救い、神様の愛と赦し、その恵みをより深く経験させてくださいます。ですから、実際にはイエス様の歩まれた道に共に参加し、共に歩むことこそが、さらなる祝福なのです。もちろん大変なこともあるかもしれませんが、神様の大きな慰めと、神様のさらなる大きな恵みを体験することになるのです。

先週、私は心に決めたことがありました。「週に一度は外に出て、人々と出会い、イエス様を伝えよう」と主に若いひとたちと関係つくりのために出かけました。

祈って教会をでましたが、外でうちの教会を眺めると、本当に美しい教会だなとあらためて感じました。大きな窓に春っぽい色紙が飾られていて、綺麗でした。「この教会に若い人たちが集い、イエス様を知る喜びを分かち合えたらどれほど素晴らしいだろう」という願い、教会の周りを歩き始めました。

しかし、その日の風は驚くほど強くて、寒かったです。神様、なんでよりによって、こんなに風が強いのですか。と思いながら、「こんな天気の声かけたら、きっと嫌がられるだろうな」と弱気な思いがよぎりました。一時間ほど近所を歩きながら祈り続けました。何人かの若者とすれ違いましたが、結局、声をかけることはできませんでした。

教会に戻り、一人で祈っていると、自然と涙がでてきました。あ「イエス様、伝道したいのですが、どうすればいいのかわかりません。」と、泣きながら祈りました。なにか、伝道する心をずっと与えられている。でも実際にどのようにすればいいのかわからない。涙ながら、祈りましたが、皆さん、神様の慰めに包まれました。

伝道する時は、寒くて、思い通りにいかないことで、挫折感で、どうすればいいのかわからない心でしたが、主の癒しと慰めが普通の日より深く伝わってきたのです。なので、霊的にはもっと生き生きした言葉で表れない喜びと生命力が湧いてくるのです。そして、土曜日にはヒヨスクさんがセウンの幼稚園で知り合ったお母さんがいるのですが、韓国に興味を持っていて、韓国の料理を教会で一緒に作りました。セウンの友達である息子さんと一緒に初めて、教会という場所にきて韓国料理も一緒に作りながら、食べたり、セジンとセウンと友達と二階の部屋で楽しくサッカーしながら、遊びました。セウンの友達はとても楽しかったみたいです。また、来ると言ってくれました。

私は個人的に主なる神様が教会に送ってくださったさらにまた慰めを受けた瞬間でした。

イエス様は、私たちが苦しめるために呼んだのでは決してありません。より祝福された人生、より豊かな人生、より価値のある人生、より栄光に満ちた人生を歩むために、さらに深い恵みの中へと私たちを招いておられるのです。

この四旬節の期間、私たちがより深く主を黙想し、私たちもイエス様のように仕える人生、誰かを生かすために自分を否認する人生を、自分の意志や力ではなく、私に向けられた神様の愛によって、そして聖霊の力によって、より深い恵みの中へと導かれていくものとなりますように、祈っていきたいと思います。

ペテロの手紙 第一 4:13 むしろ、キリストの苦しみにあずかれるのですから、喜んでいなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びおどる者となるためです